

いいですねえ

昔ながらの写真館です。お店の中には、かつてのフィルム式の写真機が置いてありました。黒いカバーのようなものが下がっています。昔、カメラマンはこのカバーを頭からかぶり、カメラを覗いてシャッターを切っていました。暗室で現像液にフィルムを浸して現像をしていたことを知るのは、昭和の世代だけかもしれません。

中学生の頃、この写真館にカメラから出したフィルムを預け、写真の現像とプリントをお願いしたことがありました。モノクロ写真の時代です。うけとった写真はピンボケばかり。「フィルムカメラで撮影する」だけのことが、器用不器用、上手下手に結果が出ます。楽しみに待った写真にがっかりすることが多くありました。

40年以上前、ここで成人式の写真を撮りました。その写真がお店のディスプレイにしばらく飾られていたことがありました。駅からの帰り道、振袖を着て、ディスプレイの中でほほ笑む自分の顔を、自慢と照れくさを混ぜ込んで覗き込むことをしていたと、そんなことを思い出しました。

久しぶりに入ったのは、証明写真の撮影のためです。カメラマンからいろいろと声をかけられます。「お客さん、右肩が上がる癖があります。ちょっとさげて」「いいですねえ」

「口角あげましょう」「いいですねえ」

「そうです。そうです。おお、いいですねえ」

カメラマンの指示に従い、微妙な姿勢の修正や笑顔創りをしていくと、そのたびにほめてもらいます。すると、気持ちよくなってきます。「なんだかうれしい」のです。カメラマンの魔法にかかったようです。多少費用がかかっても、証明写真機の箱ではなく、「写真館」を選んでよかったと思いました。人から心地よい言葉をもらえることが、写真館の良さなのかもしれないと思いました。

『なんだかうれしい』(作者:谷川俊太郎+だれかとだれか、発行:福音館書店)は、写真や絵のページに言葉が載っています。その言葉を読むと、つぎに「なんだかうれしい」と続くようです。そして、見ている&読んでいる私は、「そうだね、なんだかうれしいね」と話しかけたくくなります。

たくさん作家の作品が本になっています。ページをめくるごとに雰囲気は違っていますが、それがまたおもしろく、「なんだかうれしい」の世界に引っ張られていきます。思わず頬がほころび、うれしくなります。

いまは、デジタルです。写真は手軽になりました。スマホでも写真が撮れます。保存も編集も加工も簡単です。簡単でもそこに、「なんだかうれしい」の気持ちがこもっている写真だといいなと思います。

最近の「なんだかうれしい」は、何ですか。